

令和 7 年度第 1 回
総合教育会議 会議録

開催日 令和 7 年 5 月 2 7 日

南 あ わ じ 市 教 育 委 員 会
南あわじ市・洲本市小中学校組合教育委員会

令和7年度第1回南あわじ市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和7年5月27日（火）

午前10時00分 開会

午前11時59分 閉会

2. 開催場所 南あわじ市役所 第2別館 第5会議室

3. 協議事項

第4期南あわじ市教育振興基本計画

学ば楽しさ日本一 ～生涯を通じて、学びのいぶきがみなぎるまちづくり～
の実現にむけて

4. 出席又は欠席した構成員氏名

出席構成員

〈南あわじ市〉

市長	守 本 憲 弘	教育長	新 宅 忠 敏
教育長職務代理者	青 木 京	教育委員	近 藤 幸 常
教育委員	清 水 真 澄	教育委員	山 本 真 也

〈学校組合〉

管理者	守 本 憲 弘（兼務）	教育長	新 宅 忠 敏（兼務）
教育長職務代理者	狩 野 時 夫	教育委員	青 木 京（兼務）
教育委員	山 本 真 也（兼務）	教育委員	橋 本 直 之

欠席構成員

なし

5. 事務局関係職員氏名

総務企画部付部長 家 田 和 幸

総務企画部ふるさと創生課長 前 川 恭 範

市民福祉部子育てゆめるん課長 稲 本 順 也

教育次長 坂 東 聡 教育次長補兼教育総務課長 田 村 智 巨

学校教育課長 居 神 さゆり 社会教育課長 眞 野 匡 史

社会教育課付課長兼生涯学習推進室長 阿萬野 真 司

スポーツ青少年課長 柏 木 映理子 学校給食センター所長 船 本 武 身

教育総務課係長 佐々木 友美 教育総務課主査 興 津 里 香

1 開 会 午前10時00分

【田村教育次長補】 定刻になりましたので、ただいまより、令和7年度第1回南あわじ市総合教育会議を開催いたします。

本日の資料は、事前に皆様方へ、次第、出席者名簿、参考資料をお配りさせていただいております。

まず、本日の出席者のご紹介をさせていただきます。

配付しております名簿の順にお名前をお呼びしますので、誠に恐れ入りますが、その場でお立ちいただきますようお願いいたします。それではご紹介させていただきます。

(田村教育次長補より、出席者の紹介)

【田村教育次長補】 本日の会議を傍聴される方は、南あわじ市総合教育会議傍聴要領に準じて傍聴されますようお願いいたします。

2 市長あいさつ

【田村教育次長補】 開会にあたりまして主催者であります、守本市長よりご挨拶申し上げます。

【守本市長】 本日は公私お忙しい中、令和7年度第1回南あわじ市総合教育会議にお集まりいただきありがとうございます。

振り返ってみると、昨年度の第2回の会議では、令和6年度のスクールチャレンジ事業中間報告をテーマにして、小中学校が「学ぶ楽しさ日本一」の取組をどのように実施しているのかを各校長のプレゼンをご覧いただいた上で協議いたしました。その中で、様々なご意見をいただきく中で、課題としては、校長先生がリーダーシップを発揮して、それぞれの学校で、どのようにしたら子どもたちが主体的に楽しく学んでいけるか、それを実現していくために、もっと色濃く強く徹底していく必要があるというところでして、我々も一緒に取り組んでいきたいと思っております。

県下有志の市町が集まり、南あわじ市が世話人代表を務めております「地方部における高校教育を考える市長の会」ですが、昨年実施したアンケート結果を踏まえ、県立高校を存続させることが大事だという方向性を持っております。その後、私立高校の無償化という動きが出てまいりまして、市長会の中でも本当に危機感を持って受け止められています。県が色々頑張ってもどんどん私立に生徒が流れていく事態になっていくと、県立高校を残したくても残せないということになってきますので、本当に

本気で選ばれる学校になっていくために何をすべきかというところを、県も市も一緒になって考えましょうという流れになっております。そこで、4月21日に首長の会の総会を開催しまして、そのあと、県・市町懇話会という、知事、教育長と市町長とが議論する場があるのですが、その場でも、市町からの危機感を表明させていただいて、知事も教育長も一緒になって考えていきたいと思いますという話になっております。それを踏まえて、6月に入ってから首長の会の主要メンバーと県の教育長と議論をしましょうというような方向で今動いております。私どもとしましては、市町も主体的に取り組んで行く中で、県も、それぞれの学校が個性を出していくための取組に対して明確な後押しをしてほしいということを要望していきたいと思っております。

それでは、本日の総合教育会議のテーマですが、今年度、第4期の教育振興基本計画を新たに策定させていただきましたが、第3期の「学ぶ楽しさ日本一」は、どちらかと言えば、学校教育や子どもたちの教育のあり方を主題にして取り組んできました。今回の教育振興基本計画の特徴は「生涯を通じて学びのいぶきがみなぎる」ということで、学校教育はもちろんのことですが、世代を問わず「学ぶ楽しさ日本一」を実現しましょうということを軸にしており、学校教育と社会教育の両方でやっていきましょうということで策定させていただいております。これについて後ほど皆様のご意見をうかがいたいと思います。

それから、御礼としまして、平成17年1月11日に南あわじ市が誕生し、今年で20歳になりました。去る5月18日には市政20周年記念式典を実施させていただきました、ご出席いただいた方もいらっしゃるかと思います。ありがとうございました。

式典では、和太鼓志童の皆さんの演奏や、益子侑さんが作曲したオニオンリングに合わせて子どもたちがダンスを踊るアトラクションもございました。参加された皆様からは好評でして、子どもたちが楽しそうに芸術に取り組んでいる姿が、ある意味、「学ぶ楽しさ」のひとつの成果ではなかろうかと思っております。

いずれにしても、これまで20年歩んでまいれたのも皆様方のおかげでございます。引き続き、さらにこのまちが発展していくように努めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いをいたします。

3 議 事

【田村教育次長補】 本日の協議事項に入ります。

協議事項につきましては事務局からご説明申し上げますので、進行につきましては守本市長、よろしくお願いいたします。

【守本市長】 それでは次第に従いまして協議事項に移ります。

第4期南あわじ市教育振興基本計画

「学ぶ楽しさ日本一 ～生涯を通じて、学びのいぶきがみなぎるまちづくり～」
の実現に向けて

◇第4期南あわじ市教育振興基本計画策定アンケート結果について

【守本市長】 本日の議題は、『第4期南あわじ市教育振興基本計画 「学ぶ楽しさ日本一 ～生涯を通じて、学びのいぶきがみなぎるまちづくり～」の実現に向けて』でございます。協議については学校教育の観点から、と社会教育の観点からの2つに分けて行いたいと思います。

最初に、第4期南あわじ市教育振興基本計画を策定するにあたり、市民アンケートを実施しましたので、その結果について、特に今回のテーマに関係する部分を中心に担当からご報告させていただきます。

【田村教育次長補】 それでは私の方から、このたび策定した「第4期南あわじ市教育振興基本計画」にかかるアンケート調査の結果概要についてご説明を申し上げます。資料につきましては別冊の「アンケート調査結果報告書」をご覧ください。

この調査は、市内在住の18歳以上の方2,000人を無作為抽出し、郵送にて記入のお願いをしたもので、840件の回答をいただきました。回収率は42.0%と、比較的高くなっています。アンケート前半部分では子どもたちへの教育について質問していますが、この部分は割愛させていただきます。

問12では、学校に対して協力してみたいと思うことについて聞いています。この中では「通学路における登下校時の見守り活動」や「運動会・文化祭等の学校行事への支援」などが多かったのですが、ほかにも「授業の補助や放課後等の学習支援」「自分が持つ知識・技能を活用した学習支援」などを挙げる方もおり、「特にない」や無回答などを除けば6割以上の方が何らかの形で学校に対し、協力してみたいという気持ちがあるということがうかがえます。

問13では仕事や家事のほかに学んだり、活動していることについて聞いていますが、「特にない」とお答えになった方が50.4%と半数以上の方が仕事や家事以外の活動をしていないという回答になっています。

問14では、生涯学習講座への参加、つまり「公民館講座などへの参加」が最も低くなっています。また、問15の参加理由については、「興味・関心があるから」「知識や経験の幅を増やすため」といった理由が多く選ばれています。

問17では、今後やってみたい活動について聞いていますが、多かったのは「健康やスポーツに関すること」「インターネットの知識・技能に関すること」、次いで「仕事に必要な知識・技能や資格に関すること」といった順でした。これを年代別にクロス集計していますが、やはりお勤めの方が多い50歳代までの方については、「仕事に必要な知識・技能や資格に関すること」が多く選ばれています。また60歳代では「インターネットの知識・技能に関すること」が最も多かったのが特徴的です。

問18では、より多くの方が地域や社会での学習に参加するために必要なことを聞いています。最も多かったのは「地域や社会での活動に関する情報提供」でした。下には年代別のクロス集計を掲載していますが、ほぼすべての年代で情報提供を強く求める声が多いということが分かります。

続いて各施設の利用頻度や利用されていない理由などについての結果を説明します。

問23では、図書館・図書室の利用頻度について聞いていますが、「ほとんど利用しない」「利用したことがない」を合わせると6割以上がほとんど図書館を利用していないということが分かります。利用していない理由について多かったのは、「利用する機会や必要性がないから」、次いで「利用する時間がないから」といった理由になっています。逆に開館日や時間が合わない、読みたい本がないといった方はごく少数となっています。

問26では、公民館をどのようなことで利用したかを聞いています。16.1%の方が「利用したことがない」と答えられています。年代別に見ても、各世代まんべなく1～2割程度、利用したことがないといった方がいらっしゃるという結果になっています。利用しない理由については、「利用する機会がない」という回答が最も多くなっていますが、意外にも20歳代や30歳代の2割程度の方は「どこにあるか、何をするとところか知らない」といった回答をされています。

問29では、滝川記念美術館玉青館について聞いています。美術館という特性上やむを得ないかも知れませんが、62%の方が「利用したことがない」と回答されており、利用されていない理由を聞いたところ33ページにあるように、「利用する機会がないから」「興味がないから」といった回答がそれぞれ3割～4割程度ありました。また、全体で2割程度の方が「どこにあるか、何をするとところか知らないから」と回答しています。

問31では、淡路人形座について聞いています。こちらも市民の方の利用率は高くなく、56.4%の方が「利用したことがない」と回答されています。理由についても35ページにあるように「利用する機会がないから」「興味がないから」といった回答が多くなっています。

問33では、淡路人形浄瑠璃資料館について聞いています。こちらも「利用したことがない」という方が65.2%にもなっています。37ページにあるように、利用されない理由についてもほぼ他の施設と同様です。

次に、地域活動やスポーツ活動で今後南あわじ市が力を入れていくべきところについての質問について説明します。

問35で、力を入れて行う必要がある地域活動として、「南海トラフ地震等を想定した防災教育」という回答が最も多く、次いで「ニーズに合わせた多様な講座の実施」となっています。こうした部分が今後の地区での活動の参考になるのではないかと思います。

問35は、スポーツ活動についてです。ここでは「年齢層にあったスポーツの普及」という回答が他の回答よりもかなり高い結果となりました。スポーツ施設の利用促進、スポーツ活動の振興にあたっての参考になるのではないかと思います。

最後に南あわじ市の教育方針や主な取り組みについての認知度をご説明します。

問41で、今回の教育振興基本計画でも基本理念としている「学ぶ楽しさ日本一」について聞いてみたところ、残念なことに全体で72.3%の方が「知らない」と回答されました。これを受けて第4期の教育振興基本計画では、「学ぶ楽しさ」とは何か、といったことについて、しっかりページを割いて解説するようにしたところです。

問42で、南あわじ市がめざす学ぶ楽しさを体現する取り組みであるアフタースクール事業について聞いてみたところ、65.3%の方が「知らない」と回答されています。取り組みはしっかりとなされており、実施している学校も徐々に増えてきているのですが、反面、認知度が低いといった点については、今後力を入れていくべきところかも知れません。

問43で、ふるさと創造学習、旧のコアカリキュラム事業についてきいてみたところ、こちらも75.8%が「知らない」という回答になっています。

問44では、令和5年4月に旧三原志知小学校を改修して開設した学ぶ楽しさ支援センターについての認知度です。こちらも74.8%が「知らない」と回答されています。

このように、基本理念や主な取り組み等についての認知度はかなり低い、という結果がアンケートから見て取れると思います。

以上、アンケート調査結果についての説明とさせていただきます。

【守本市長】 アンケートの説明が終わりました。

◇学ぶ楽しさの例（アフタースクール）について

【守本市長】 次にそれぞれの観点からの話に入る前に、アフタースクール事業は、あらゆる世代の方が「学ぶ楽しさ」を実感できている例のひとつですが、児童だけではなく、スタッフやまちの先生方も、アフタースクールに参加されたことでどのような

効果があったかといったことを、担当課より説明いたします。

【柏木課長】 アフタースクール事業は、市内全小学校に通学する全ての児童を対象に、まちの先生といった地域住民の参画を得ながら、放課後に、遊びを通じた多種多様な体験活動や交流によって主体的に学び、学ぶ楽しさを知り、豊かな心を育むことを目的とする事業です。

市内には小学校15校区ございまして、平成31年度から、八木小学校をモデル校区としてスタートしております。毎年2校区ずつ増やししながら、本年度で13校区開設し、来年度には、志知、沼島校区の開設をめざし、全小学校15校区の開設に向けて進めております。

アフタースクール事業を通じて、どのような効果が表れているかという点でございますが、お手元の放課後児童のアンケート資料にそって説明をさせていただきます。こちらは、昨年度末に実施いたしましたアンケートの結果の一部抜粋となります。

まず、保護者から見た子どもたちの変化として、体験活動に参加する前と、後で、子どもたちはどのような変化がありましたかという問です。「放課後の楽しみが増えた」という回答が、59.0%と最も高い結果となっております。次に、「知的好奇心や視野が広がった」が48.4%。「まちの先生といったプログラム講師や友達との関わりから豊かな人間性が育まれた」が28.6%となっております。「プログラムで教わったダンスや新しい遊びを家でも夢中になってやっている」とか、保護者の感想としまして、「わが子はこんなことが好きだったんだ」というような子どもの新たな一面を知ることができた。「様々なプログラムの体験が子どもたちの将来につながっているのかな」というような期待する思い、そして、「児童がアフタースクールで体験したことを保護者に話してくれる」ことで家庭内のコミュニケーションにもつながっていることがうかがえます。

児童の感想としては、「体験プログラムには自由に参加したりしなかったりと子どもたちの意思、選択により参加できるということが楽しい。」まちの先生の体験プログラムの他に、リクエストプログラムというのもあり、「自分たちで考えて行動できるから楽しい。」「大好きなプログラムがあるから、早くアフタースクールに行きたいという気持ちになる。」というような感想がありました。また、将棋のプログラムでは、「他の学校の子とオンラインで将棋をして楽しかった。」という感想もあり、コロナ禍でオンラインによる交流をしていたことがきっかけとなっています。

子どもたちと毎日関わっているスタッフの感想として、「働いていて楽しいという気持ちはずっと右肩上がり。」「自分らしく伸び伸びとできるようになってきた。」「プログラムをきっかけに子どもたちの意外な一面を見ることができて嬉しい。」といったように、スタッフの方たちも「自分が子どもの時にこんな事業があったら良かったのに。」という思いとともに、自分自身も楽しんでおられる方もいます。「アフタースクール

の楽しさを地域の人さんにも知ってほしい。」という感想もございます。

毎月、スタッフが学校に、プログラムの一覧表を渡して共有させてもらっておりますが、以前、フラダンスのプログラムをした時には、その様子を見に来られていた小学校の教頭先生も子どもたちと一緒にプログラムを楽しんでくださり、守本市長も、ウクレレ演奏を子どもたちと一緒に楽しんでもらっています。

また音楽のプログラムでは、子どもたちの日頃の成果を、保護者や学校の先生方に披露する機会があり、学校の先生方にも学校とは別の子どもたちの一面があるんだということを知ってもらう機会にもなっております。

まちの先生の感想としまして、子どもたちと関わる上で、「同じ目線で話すように心がけている。」「子どもたちの考えや個性がプログラミングに出ていておもしろい。」「学校の授業にも役立つ考え方を学んでくれれば。」というような思いもうかがえます。

また、将棋のまちの先生の中には、「考えるという環境をアフタースクールの場で与えてあげたい。」という思いを持っておられ、最近の子どもたちは受け身の子が多いので、子どもたちが主体的に行動できるようにというふうに考えながら関わってくれていることがうかがえます。

「好きこそものの上手なれ」という言葉がありますように、アフタースクールを通じて子どもたちはプログラムをきっかけに好きなことを見つけて、夢中になり、何かに没頭して、その中から新しい発見に感動して学ぶ楽しさにつながる。そして、地域の方と関わることで社会性やコミュニケーション力、自主性を育てている。まちの先生、スタッフなどの、地域の方々にとっても、未来を担う子どもたちの可能性を広げるべく、すてきな種まきをしてくださっています。その芽がいつ出るかは分かりませんが、子どもたちが、成長する姿を間近で見ることができる楽しさと、子どもたちと関わることで自分の生きがいややりがいにつながっているということから、子どもも大人も学ぶ楽しさを実感できているのではないかと考えております。

今後、アフタースクール事業を展開していく上で活動場所の確保ですとか、人材確保、また人材育成など課題は色々ございますけれども、引き続きこの事業を進めてまいりたいと思っております。

◇学校教育の観点からの取組について

【守本市長】 続きまして、学校教育課の観点から、「学校での学ぶ楽しさ」の実現と発信力強化への取組について事務局より説明いたします。

【坂東教育次長】 「学ぶ楽しさ」については、第3期南あわじ市教育振興計画から取り組んでいるところです。その成果を、全国学力学習状況調査より、学ぶ楽しさにつ

ながるような項目を拾ってみました。それによると、自己肯定感、学びに向かう力、解決能力が高まっているということが読み取れます。また、令和3年度からの「学校に行くのは楽しい」という項目についても9割弱の児童生徒が毎年肯定的な意見で回答してくれています。

しかし、最初に説明のありましたアンケート調査からもうかがえますように、色々な課題があります。まず、基本理念「学ぶ楽しさ日本一」の周知度です。「内容を知っている」と答えた方が全体の6.5%に留まっております。保護者世代の認知度でさえも16.8%です。また、学校教育のみで「学ぶ楽しさ」を育んでいくのではなく、家庭、学校、地域が連携協働して基本理念に基づいた教育を推進していくことが、今後の課題のひとつとなっていくと思います。

次に、学ぶ楽しさを軸にした教育活動の推進の具体的な施策ということで、第3期南あわじ市教育振興計画から抜粋した、学ぶ楽しさが主体的な学びに向かっていくことについての説明文を載せております。ここから、児童生徒の活動をほめることで、自己肯定感が高まり、主体的な学びにつながる、そして学びの楽しさを実感するという構図が読み取れます。多くの先生方が「ほめる」という効果を知って考えながらほめてくれてるということが一番だと思います。別紙には、元麴町中学校の校長されていた工藤勇一先生の書籍から参考に一部掲載させていただいております。その中で、効果的なほめ方、主体性を奪ってしまうほめ方について書かれており、大事な各段階でほめることの大切さが学校現場に周知徹底できていなかったところは反省点でもあり、今後の課題だと考えております。

今後の取組としまして、学ぶ楽しさのサイクルを意識した教育活動の推進を挙げています。めざす教育活動として「ありたい自分、ありたい未来を実現するため、気づきや協働、表現する経験を通して学ぶ楽しさを発見し、さらなる主体的な学びの楽しさへ発展進化させる」とありますが、具体的に言いますと、先生方には、教育振興基本計画にも掲げている「7つの学ぶ楽しさ」について、なんとなく楽しそうで終わらせないよう、学ぶ楽しさのサイクルを意識した指導を徹底してほしいということです。また、子どもたちはなんとなく楽しいと感じていることはたくさんあると思うのですが、何をしたら楽しかったのか、その辺りを明確にすることによって、自分はどういうことに学びの楽しさを感じる、学ぶ意義を感じる。だったらもっとここに挑戦していこうというつながりができればと思っております。また、保護者との連携としては、学校だけではなく、家庭、地域においても言葉かけを意識していただけるよう働きかけをできればと思います。

学ぶ楽しさサイクルは、誰もが持つ好奇心、学びの芽吹きがあつて、学びの向上から、学んだことを人に伝えるという学びの発展へ進み、その中で学びの開花、学ぶ楽しさを実感することでさらなる学びにつながることで、そして人生を豊かにする。そして、それがまた新たな気づきから学びの向上へつながることで、学びの楽しさから主

体的な学びになっていくのではないかなと考えております。

これらは、通常授業だけではなく、学校行事や、ふるさと創造学習、スクールイノベーション事業、夢プロジェクト、防災教育等課題学習、兵庫型体験教育の充実、オンライン授業、離島留学支援などの事業の中においても、このサイクルを意識した展開をしていければと考えております。第3の居場所、校内サポートルーム（ISR）、適応教室（OSR）では、学校に行きづらくなった子や、登校しぶりが出てきたかなとかいう子に対して学ぶことの楽しさを伝えていければと思います。

続きまして、学ぶ楽しさを進める中で、ふるさと創造学習の「南あわじっ子につけたい力、3つの資質能力」である、「互いの強み弱みを認め合い、チームとしてつけたい力」「周りの状況からよみとったり、自ら収集したり情報を処理し、活用する力」「課題を明確にし、見通しをもって主体的に取り組む力」について、これからの変化の激しい社会を生き抜くための力として、子どもたちの身に付けていきたいと思っております。

平成29年に改訂された現行の学習指導要領には、「より良い学校教育を通じてより良い社会を創る」という目標を学校と社会が共有するとなっています。社会に開かれた教育課程の実現はとても重要なところであり、「学ぶ楽しさ」を学校から地域へ発信していこうと考えております。

次に、壮大な計画になりますが、学校の「学ぶ楽しさ」から「学ぶ楽しさ」が溢れる南あわじ市に、ということで、長期のスパンでは、「学ぶ楽しさ」を身に付けた子どもたちが激しく変化する社会の中で、未来を通じて学び続けられることをめざします。短期のスパンでは、学校と地域の協働活動を通じて、大人も「学ぶ楽しさ」を実感し、それをさらに広げることで、学びのいぶきみなぎる南あわじ市につながるのではないかと考えております。

続きまして、学校からの発信力についてですが、「学ぶ楽しさ日本一」のロゴマークやイラストを学校でも積極的に使ってまいりたいと思っております。

また、教育委員会では「つけたい力」と「学び方」について誰が説明できるかというループリックを設定していますが、令和6年度は、スクールチャレンジの中間発表という形で、校長が「つけたい力」「学び方」を説明できるようにプレゼンを実施しました。その中で、学校の特色などをもっと前面に出していかなければならないといった課題が出てきたと思います。令和7年度につきましては、次の段階として、組織として取り組むためには、ミドルリーダーが「つけたい力」と「学び方」をしっかり自分の中へ落とし込んで説明ができるように取り組んでまいります。今年度も授業改革についてさらに焦点を当てて、学校で研究した結果を情報共有していきたいと思っております。学校で一番長い時間となる授業時間が子どもたちの居場所となるよう、勉強するってこんなに楽しいんだと思えることで、年々増え続けてる不登校、生徒指導に関する課題の解決につながってくるのではないかと考えております。

これらの取組を広く知ってもらうために、夏休み期間中に、市内の学校を3つのブロックに分けて、ミドルリーダーが学校の学びについてプレゼンを行い、情報共有や意見交換を行います。そして、本年11月16日に「教育みらい創造フェスティバル」を開催し、保護者、市民、3市の教職員などに参加いただき、本市の教育活動の周知を図ってまいりたいと思います。内容としましては、オープニングアトラクションとしてバイオリニストの益子侑さんとアフタースクールの子どもたちのダンスを予定しております。子どもたちが楽しそうにダンスする姿を先生方やみなさんに見ていただきたいと思います。その後、「学ぶ楽しさ」と基本理念の周知として、少し時間をいただいて私から説明させていただきます。そして、夏休みに実施したミドルリーダーによるプレゼンの中から何校かを選びパネリストとして出席するとともに、学識経験者の方にコーディネーターとして来ていただいて、授業改革についてのディスカッションを実施したいと考えております。

また、学校の大きな変革期となっている部活動の地域展開につきましても、地域で支える仕組みをしっかりと作っていく必要があります。市民が、地域でスポーツや芸術文化を楽しめることが本来の趣旨だと思います。そこで、フェスティバルの記念講演として、東京オリンピック柔道金メダリストのウルフ・アロンさんに来ていただける予定となっております。

もうひとつ、学校での教育活動の発信として、来年2月に「教師同士が学び合う仕組みづくり」として、阿万小学校にて授業公開と授業研究会を実施する予定です。子どもが主体となる授業、教師が喋りすぎない授業などについて色々な研究が進んでおりますので、学び合いの機会になればと思っております。阿万小学校では授業改革が進んでおり、不登校児童も今もほぼゼロと聞いております。阿万小学校では、授業改革が進むにつれて学校改革も進み、長時間勤務も他の学校に比べて減ってきているという成果が出ております。

以上で、説明とさせていただきます。

【守本市長】 ただいまのご意見を踏まえまして、各委員からご意見をお伺いいたしましたと思います。

【山本委員】 アンケート調査結果の中で、淡路人形座などの施設を知らない人が想像以上に多いんだなという感想を持ちました。施設に協力してくれている人や興味を持っている人を中心に、取組を大きくして、知らない人の気を引くような形で進めていただき、いずれは多くの人に知ってもらえるようになっていただきたいと思います。

アフタースクール事業の取組の説明の中で、将棋のプログラムではオンライン対戦をしているのですね。私も小学校の時に将棋が好きで、学校で友達と盤上で対戦していたのを思い出しました。時代が違うなと感じました。

資料の中で、ほめることの大切さについて書かれているところが一番目に留まりました。私も、子どもの時代から、怒られてほめられて育ってきたので、すごく怒られてやらされて、その中で一瞬ほめてくれる言葉があって、それが嬉しくて伸びてきたっていうところがあります。ほめることは大事というのは前から言われていますが、教育者の方はほめることについてどんなふうと考えて、ほめるという行動に向かっていくのかということ一度聞いてみたいと思います。もしできればアンケートを取っていただきたいと思いました。

それぞれがきちんとした意図があって、考えながらほめることを実行していくことが大切なのではないかと感じました。

【橋本委員】 私自身、意識している部分でもあるのですが、どうしても教育委員会は学校教育が中心の考えになってしまいますので、そうではなく、生涯学習も含めた上での教育全体を考えていかなければならないと常に思っています。南あわじ市の第4期の計画は、同じような考え方で書かれているところにとても共感いたしました。

アンケート結果を踏まえて、学校の取組などの周知度の低さについての課題を説明されていましたが、私も近所の方と話をすることがありますが、思ったよりも学校に対して興味を持たれていない方が多いと痛感します。自分の子どもが小中高校生の間は若干の興味があると思うのですが、子どもが学校を離れますと一気に学校への興味がなくなるようで、どんどん時代が進んで学校の教育活動が変化していても、認識が昔の学校の状態のままで止まっている市民の方が多いのだということを感じています。

教職員の働き方改革にしても、民間の他の人はもっと大変なんだから、とおっしゃる方も多く、理解をしていただくのはなかなか難しいのが現状ではないかとも感じているところです。そういう社会の状態もアンケートの結果に現れているのではないかと思います。

学校再編が議論されていく中で課題になってくるのが、地域と学校のつながりが薄まってしまうのではないかとということと、それを理由に統廃合には賛成できないという方が地域の中にはいらっしゃるということです。本当はもっと学校と関わりたいのにも思っても、残念ながら学校を統廃合すると地域が広がりますから、その辺りは非常に課題として残る部分だと思います。

そういう意味では、学校への関わりに関して課題はありますが、子どもとの関わりを考えた場合に、南あわじ市で実施しているアフタースクール事業のような、いわゆる放課後事業がひとつの鍵になるのではないかと思います。その辺りを充実していくことで、地域の方に子どもに関わっていただく機会を提供し、力を借りるような取組になることが、今後、重要になるのではないかと考えています。

ほめるということに関しては、自己肯定感を高めたいということが主な目的になると思います。市の部長会議で、学校では先生が一所懸命子どもたちをほめています、

と言ったことを紹介すると、皆びっくりした声を上げるんですね。出席者は部長さん方なので50代半ば以降の方が多いのですが、子ども時代はほめられるより怒られてきた世代なのか、その辺りは現在と大分変わってるのではないかと思います。

10年以上前に文科省から出されているリーフレットを見てみますと、自己肯定感を高める色々な方法がある中で、日本人にはほめるより認める方が合っているのではないかといったことが書かれています。単純にほめるだけで上手いかないという先ほどのご説明はそのとおりだと共感いたしました。

【狩野委員】 「学ぶ楽しさ日本一」の認知度をもっと上げるにはどうしたら良いか、私なりに考えてみました。先ほど市長や橋本委員もおっしゃったとおりですが、「学ぶ楽しさ日本一」を学校教育だけではなく、幼少期から高齢期までの生涯にわたる市民のための「学ぶ楽しさ」として取り組む事が必要かなと思います。学校だけが「学ぶ楽しさ」に一生懸命取り組んでも、それは仕事だから当たり前と捉える方もおられると思います。そこら辺が、認知度が、高まらない理由のひとつかなと思います。

また、知識を学ぶだけでなく、体験や人との関わりの中で「学ぶ楽しさ」を味わう取組も必要だと思います。例えば、親子で玉ねぎを収穫して楽しもうとか、そういう取組を計画してはどうでしょうか。現在は、2世代や3世代と一緒に体験する活動がどんどん減っていった現状があると思います。

毎月、南あわじの広報紙を読んでおります。市長のメッセージも読んでおります。提案ですが、広報紙に、学ぶ楽しさのそれぞれの取組を毎月のミニコラムとして、発信してはどうでしょうか。そうすると毎月楽しみに、この広報紙を読んでもらう人が増えるのではないかと思います。

広報紙への掲載の一例ですが、南あわじの教育予算は、単純計算で税収入の違いはありますが、10年前は子ども1人あたり約45万円に対し、今年度は1人あたり約98万円です。かなり増額されているわけです。これらの予算は、施設設備だけでなく、遠距離通学をする子どもたちの通学費の補助などにも使われているのではないかと思います。これは、南あわじ市の独自の魅力ある事業ですから、もっとPRすることで、南あわじ市の人口増加にもつながってくればと思います。実際に、若い世代が家を建てる時、南あわじ市は、遠距離通学する場合、かなりの補助があるらしいといったことを話しているのを聞いたことがあります。

また、部活動の地域移行についてもコラムで発信したらどうでしょう。現在、広田小学校では、元校長の石原先生が元々あった小学校吹奏楽部の地域移行に伴い、今年度、広田親子バンドを立ち上げました。この土曜日に行われる運動会で、入場行進曲を親子バンドが演奏します。現在のメンバーは小学生34人、卒業生、親、地域の人11人で構成されています。この前、練習風景を見させてもらおうと、親も子も楽しそうに練習していました。親と、子どもと、後輩と、先輩と一緒に演奏できて楽しい。

そんな雰囲気練習しておりました。

小さい子からお年寄りまで楽しく学んでいる姿。そういう姿を毎月の広報紙などで発信することによって「学ぶ楽しさ日本一」の認知度が上がるのではないのでしょうか。

【青木委員】 話題になっている「ほめる」という点ですが、中学生などは、先生は何も分かっていないのにただほめられたって何とも思わないと感じる子もいます。〇〇さんは頑張っていて偉いなどほめられても、先生の気持ちが伝わって来ないのです。そこは、〇〇さんが主語ではなくて、先生が主語でほめてくださると良いのかなと思います。先生はこういうところを見てこう思ったぞというところを伝えてくれた方が良いのではと思ったりします。また、資料にあるように、プロセスをほめるというのはまさにそのとおりで、結果にコミットしない方が良いかなと思います。

このお話は、先ほど説明のあった11月のフェスティバルに入れても良いぐらいじゃないかと思います。授業を変えられるという内容よりは、「ほめる」ということについて皆で考えたり意見交換をしたりする方が、皆さんが参加できるのかなと思います。授業のお話だと聞く一方になってしまいましたが、参加者も話す機会が持てて、例えば家ではどうほめているかとか、本当はこうほめたかったけど上手くいかなかったんだといった話ができたらいのかなと思いました。

資料の中で、「南あわじっ子につけたい力」として、3つの資質・能力が書かれていますが、まずは自分自身が楽しむこと、「好きこそものの上手なれ」に没頭してほしいわけですから、この3つの資質・能力を子どもたちに身につけたい、ということになると、違う方向に進んでしまう気がして、少し危機感みたいなものを持ちました。まずは自分で楽しむ力をつけていくためにみんなで何ができるか、自分で何ができるか、というところに着目したらどうでしょうか。

それから、アフタースクール事業の資料の子どもたちの変化についてのアンケートを見ていますと、まずは楽しみが増えて、そこから好奇心が増えて、関わる人間性が育まれて、その結果健康になったり、自分で考えられるようになったり、といった階段をちゃんと登っていつていると読み取れました。このままどんどん進めていって良いんだなと、アンケート結果を見て感じました。ただ、残念なのは、児童の感想として紹介されている中で、「学校とは違ってアフタースクールは楽しい」という「学校とは違って」というところです。学校と変わらない、学校とアフタースクールが連動していて、「学校と違う」というところがクローズアップされないようになっていけたら良いのではと思いました。あと、資料にはメリットしか書かれていませんが、いつも清水委員もおっしゃっていますが、何事にも問題点があって、でもピンチはチャンスなので、そこから見えてくることも多いと思いますので、今ある課題を、アフタースクールのスタッフの方や関わってる方だけでなく、みんなで考えて、地域の方々も私の一言で変わったかも、と思えるようなことがあると、私もやろうかなと思ってくれた

り、だんだん広がっていったりするのではないかと思います。

校内サポートルームについてですが、この前、不登校対策の取組について、加西市のサポートルームを見て来ました。校内に不登校対策のために部屋がありました。南あわじ市は校外に、中学校の近くに場所がある。これはどちらも大切な場所だとすごく思いました。南あわじ市がやっている校外にある子どものためのサポートルームの重要性をひしひしと感じました。学校に来れないんだから学校の中にあっても辛いという気持ちの子どももいます。両方にあるようにできたらということを本当に思っていて、今後皆さんと一緒に、話し合っていきたいと今思っております。

【近藤委員】 先日、校区の小学校の運動会がありました。やはり小学校は地域コミュニティの中心なんだと改めて感じ、非常に元気をもらいました。校長先生の挨拶も非常にコンパクトで分かりやすく、なおかつ細やかで、地域の人に向かって、練習中に騒音を立ててご迷惑をおかけしましたと言っておっしゃってましたけど、非常に良かったと思います。

ただ、学ぶ楽しさの認知度を上げるという観点から言うと、例えば、南あわじ市では「学ぶ楽しさ日本一」をめざしていますと。これに基づいて子どもたちが今年度のテーマをこんな風に決めました。とか、子ども達が、自主的に、例えば準備物とか、表現活動とかやってみましたとか。そんな風に言うと随分印象が変わるだろうと思います。学校の発信力、特に校長の発信力というものに、私はとても期待したいと思いますので、地域の人が集まっている所でそんなふうにおっしゃっていただくと、子どもたちが通っている学校はこういう方へ向かっているのだということが、スムーズに浸透していくのではないかと感じました。

また、この前の教育委員会でもお話ししたんですけども、教育委員が学校訪問する中で、管理職から色々説明を受けるわけですが、ここ何年かは、授業に特化して学校訪問をしておりますので、校長先生から学校の様子の紹介をしていただく時に、例えば、私の学校ではA先生の授業が一押しです。是非見てください。とか、B先生は発展途上ですが今こういう事に取り組んでいますので、この活動を見てあげていただけませんか。とか、C先生のクラスにはこういう個性・特性がある子どもがいます。そこで、このクラスではこういう取組によってこの子の支援をしています。というような説明をしていただくと、学校訪問がより一層充実するし、そういう説明ができる校長がいるということは、その学校での授業改革が順調に進んでいると感じられます。今後の校長さん方の発信力・企画力に期待したいと思っております。

【清水委員】 アンケートの結果報告の中で、公民館、図書館、美術館を利用していますかというアンケートはあったのですが、スポーツ施設やグラウンドの利用についての項目がなかったことが気になったのと、以前は地区の公民館に地域の人達が集まる

というイメージがあったと思うのですが、最近は自宅をコミュニティの場に提供して
いたりとか、福良だったら水族館みたいなところを作ったり色々と集まる場所が広が
ってきているので、アンケートの中に、どんなところに集まっているかという項目が
あっても良かったのではないかと思います。公民館などの公共施設を利用していな
い人がただ家にいるわけではなく、色々な所に皆さんが集まって楽しまれてる方はた
くさんいますので、地域の方々がどのような活動をされているのかを深掘りできるよう
な項目があればよかったと思っています。

私が、アフタースクール事業に関わって5、6年経ちます。アフタースクールの先
生方が子どもたちと一緒にダンスして皆とても楽しそうです。第4期計画からは、市
民も巻き込んだ生涯学習を掲げているので、アフタースクールという名前だとどうし
ても子どもたちだけのイメージになってしまいましたが、地域の人たちも子どもたちや
学校と関わりたいといったアンケートの結果もあったので、まちの先生になるには荷
が重いけど、子どもたちと一緒に何かできるのならと思っている人はおられるかもし
れません。アフタースクールのプログラムを公民館で、地区の人もどうぞといった感
じで広げると、子どもたちも地域の人と交流できる時間が増えるのではないでしょ
うか。また、南海トラフ地震に備えた防災教育を希望する声もアンケートにはありま
したので、例えば、アフタースクールの時間とずらして、先に大人対象の救命救急講習
をした後、AEDの実技講習の時に子どもたちも一緒に入ってもらおうといった取組
などはどうでしょうか。地域の人たちも一緒になって活動できる取組へと一歩進められ
たら、さらに広がりができるのではないかと思います。

不登校の子どもたちの中には、学校に行くのはちょっとしんどいけど、他の活動に
は参加できるという子もいるので、学校に来ていないイコール家にずっといるという
わけではないと思います。自分が打ち込めることや好きなことができる場があれば、
そこでその子はたくさん社会性を学んでいることになります。部活動の地域移行が、
もしかしたら学校に行きづらい子どもたちの受け皿にもなり得るのではないかとい
う思いもあります。学校には行けなくても、他の場所で活動していて楽しんでもとい
った子どもの様子を地域活動と家庭と学校で共有できたら、学校の先生の関わり方や声
かけの仕方も変わるかもしれないので、これらの連携ができるような仕組みがあれば
いいのではないかと思います。

【新宅教育長】 本市のアフタースクール事業については、県内の教育長もかなりご存
じで、実はうちの市も取り入れたいと思っているという話から、どんな所に課題があ
るかとか、どういうふうにして広めていったのかといった質問をいただきます。かな
り注目されてる取組だと感じています。

なぜアフタースクール事業が注目されているかということですが、働いている保護
者が増加する中で、放課後の時間を子どもたちがどのように過ごすかというところに

高い関心があるからだと思います。

今回のアンケート結果を見ていると、「学ぶ楽しさ」がまだまだ伝えきれていなかったということを認めざるを得ない状態です。学校が「学ぶ楽しさ」に向けてこういう取組をしていますということを外向きに発信していかない限り、広く理解を得られないと思います。また、今までの仕組みを大きく変えていくということになると、これまで十数年にわたってやってきたことを変えていくわけですから、今までの授業と全然違って、子どもたちが教室を歩いて回って、勝手に喋るといったことがまず起こります。そこで、保護者が学んできた授業スタイルとは全く違うところについて理解を求めないといけません。どのようにそれを発信して説明をしていくのかということについては、しっかりと各学校で考えてほしいというところですし、その仕組みづくりを、教育委員会で作っていきたいと考えております。

そういう意味では、さきほど説明にもありました、11月に予定している教育みらい創造フェスティバルは非常にいい機会であると思います。本当は、学校単位でこの改革についてしっかりと情報発信ができて理解を得ておればおそらく青木委員がおっしゃったところに行き着くのだろうと思っていますが、その前段という形であえてこれに挑戦しています。

改革は本当に時間がかかります。一步一步着実に理解をしていただいて進めていくということをしっかりと今年度もやっていかないといけないと思っています。

情報発信や広報紙でのミニコラムの掲載といったご意見もいただいておりますけど、令和7年1月の広報紙に私のインタビュー記事が掲載されましたが、あの辺りから毎月のように、色々な取組について掲載いただいております。できる限りこれからも継続していきたいと思っています。

学ぶ楽しさのサイクルのイラストは、第4期計画を策定するにあたり、「学ぶ楽しさ」が一目でわかるものはないのかということで、素案みたいなものを紙に書いて木の幹と枝と葉っぱを付けて周りに螺旋を書いて、こういうイメージで何かイラストにできないかということから始まり、最終こういう仕上がりになりました。より「学ぶ楽しさ」をイメージしていただけるイラストになったのではないかと思いますのでご紹介をしておきます。

【守本市長】 委員の皆様からは、非常に盛りだくさんの意見を出していただけて大変参考になるとっております。

日本全国で、不登校がガンガン増えている現状がありますが、これは現代の子どもたちが弱いからということではないと思うのです。子どもたちは、多分潜在的に、ここでこんなことやっていても将来役に立たないだろうと思っているのだと思っています。だから学校に行かなくてもいいという考えになってしまうと。そんな中で、学校側が変わっていないという状況だと思います。AIが登場したことで、情報を吸収し

て再現するなんていうことは、よっぽどコンピューターの方がうまくできるわけですから、そうすると自分は何をしたらいいの、といったことは学校では全く教えてくれないということが根本的な理由ではないかと私は思います。そういう意味で言うと、阿万小学校で取り組んでいることは本当に素晴らしいことです。子どもたちが主体的に参加する取組ができているからこそ、阿万小学校では不登校がないというところに表れてきていると思います。結局、子どもたちが学校に行って、おもしろい、楽しいと感じられ、成長実感が得られるから、だから学校へ行くのだと思います。ですから、こういった世界を作っていないと、学校が子どもに見捨てられてるという状態になっていくのだと思います。

ただ、サポートルームは大事だと思っていますし、校外の居場所も大事だと思っておりまして、南あわじ市では両方に取り組んでおります。しかし本当はそこに力を入れるのではなく、不登校の子どもを出さないようにすることが本当はやるべきことだと思っています。

それから、ほめることについてのお話がありました。私が経産省にいた時に、産業人材政策室というところで、企業の人事マネジメントの方針などに関わっていたことがあります。その時は、業績評価や結果評価が主流でした。当時は富士通が成果主義ということ始めており、我々は、これはうまくいかないだろうと予言を立てていたところ、やはりうまくいきませんでした。それはプロセスを評価していないからです。南あわじ市の人事評価は、業績評価ではなく行動評価になっております。おそらくこの自治体もやっていないと思っています。ほとんどが結果評価、成果評価になっているはずですが、もちろん目標を定めてそれにむかって一生懸命やることも大事ですが、その一生懸命さをどう評価するか、届かなかつたら次何をやるか、どんどん新しくチャレンジしたらそれを評価する。結果が出ればいいですが、出なかったとしても×をつけたりはしない、そういう形にしております。おそらくこれは最近の流行りの脳科学でも立証されているはずです。

ですから、プロセスをほめるということは、単に頑張ってるよね、ではなく、実際ほめる前には観察が必要になってくるはずです。観察をした上で具体的に何をしたらよく頑張ったね、と言えるかというところは、おそらくこれが先生に問われている資質なのではなかろうかと感じています。

校長先生からの発信の重要性について、近藤先生からもご意見いただきましたが、本当にそのとおりです。昨年度のスクールチャレンジ事業の中間報告のプレゼンでは、「学ぶ楽しさ日本一」と書いた校長先生がほとんどおられませんでした。まずその段階で何も理解できていないのではないかと感じておりました。

今年度予定している、教育フェスティバルで発信しようという取組はいいアイデアだと思います。南あわじ市や各学校がやっている取組については、子どもや保護者、市内の人たちは、当然の取組だと受け取っており、外から見て南あわじ市で取り組ん

でいる教育がどう評価されているかは知らないわけですね。ですから、私自身は、アフタースクール事業は最先端の取組だと思っていますが、実はそれが皆さんには全然伝わっておらず、子どもたちも自分たちが最新鋭のことをやってるなんて全然思っていないでしょう。ですから、外から見てどういうふうに見られているかというところを発信していきたいと思っております。

アフタースクール事業と部活の地域移行の取組は一緒だと思っています。おそらくこれから高校の部活動もなくなっていくと思われます。ですから、アフタースクール事業と言いつつも、将来的には子どもも大人も参加をする。そして、小学校だけでなく小中高と続いていくという、そういう地域活動の場がたくさんできていくのがあるべき姿なんだろうと思っております。すぐにはいかないと思いますけど、そういうことをちょっと念頭に置いて進めていきたいと考えております。

今日は、色々なアイデアをいただきましたので、事務局にはそれを整理していただいて、できることはどんどん進めてほしいと思います。

◇社会教育の観点からの取組について

【守本市長】 続きまして、社会育課の観点から、社会教育施設での「学ぶ楽しさ」の実現と人が集まる取組及びその周知方法について事務局より説明いたします。

【眞野社会教育課長】 まず、私の方からは社会教育施設ということで、図書館、淡路人形浄瑠璃資料館、淡路人形座、玉青館について説明させていただきます。

市立図書館では、自習スペース等の設置、イベント実施、特集コーナーの棚づくりなどの取組を行っておりますが、本に興味のない人、若い世代の利用が少ないというところが課題となっております。

淡路人形浄瑠璃資料館では、常設展・特別展を実施しているところですが、外向けの周知が十分図れておらず、市内や島内住民の利用が少ないところが課題となっております。

淡路人形座では、淡路人形浄瑠璃の魅力発信のため、常設館での公演に加え、出張公演を実施するとともに、異文化芸術とのコラボ公演やオリジナル演目にも取り組んでおります。課題としましては、新人の座員が増えているものの、公演できる演目が限られていることが挙げられます。

玉青館では、展覧会事業、イベント実施など色々取組んでおりますが、利用したことのない市民が多く、まだまだ市内の周知が足りないところが課題となっております。

これらの課題を踏まえまして、今後の取組としましては、いずれの施設も周知の工夫や若年世代の取り込み、興味を持たせるイベントの開催と発信などに力を入れてい

く必要があると考えております。

社会教育課からは以上です。

【阿萬野生涯学習推進室長】 生涯学習推進室からは、公民館、働く婦人の家について説明いたします。

公民館では、21地区公民館がそれぞれ事業を行っており、令和6年度では、全体で108講座、2,364人に参加いただいて、延べ人数では4,000人以上の参加となっております。活動は地区によってばらつきはありますが、それぞれ活気はございます。

働く婦人の家につきましては、令和6年度で32講座、507名が受講しており、特に最近では、山登りといったアウトドア講座を重視したり、女性に限定せず男性の受け入れをしたりしています。

生涯学習推進室の行う事業として、公民館講座17講座、283人。青少年健全育成事業であるわんぱく塾、高齢者教育として高齢者大学うずしお学園。これらを実施しております。

それぞれの課題としましては、若者が集まる仕組みづくりが十分でないということ。事業の周知ができていない、学びの場の提供が少ない。市民が学べる、学びたいと思うニーズが十分に酌み取れていないというようなことでございます。

今後の方向性としてしましては、生涯学習の拠点として、人づくり、つながりづくり、地域づくり、それと情報発信の強化をめざしてまいります。

今後の取組として、公民館としましては、全ての地区の活動、事業が集まれる場所としてのフリースペースの整備。そして、一番力を入れていきたいところとして、公民館職員の研修です。これは、情報共有と職員のスキルアップを進め、市民が学びたいと思える、公民館づくりをめざしていきます。

働く婦人の家では、単発開催や土日、祝日などで市民が参加しやすいという講座の特徴を活かして、市民の学びのニーズを取り入れた新しい講座を開設してまいりたいと思います。

そして、生涯学習推進室では、地区公民館活動について情報提供を行い、主催講座を地区に広めていくことで、講座運営に関するノウハウの伝授や指導を行っていき、結果として、各公民館の運営能力を高めていきます。青少年育成推進事業についても、子どもの取り合いが起これないように情報発信し、子どもたちが学びたいこと選んで学べる環境を整備します。高齢者大学につきましても、老人クラブとの連携を深めて、会員獲得に繋げたり、活動を活性化したりというような相乗的な運営関係を作っていくというような方向で、課題解決に向けて動いてまいります。

以上、生涯学習推進室からの説明とさせていただきます。

【柏木スポーツ青少年課長】 スポーツ青少年課からは、スポーツ施設について説明させていただきます。

資料にありますように、スポーツ施設は市内に14施設あります。

スポーツセンター以外の小中学校の体育施設の学校開放も実施しております。また、一部の団体については施設の使用料の減免も行なっております。詳細は資料をご確認ください。

課題につきましては、施設の老朽化、地域ごとの利用格差、スポーツ振興や推進に係る人材不足が挙げられます。

課題解決に向けての今後の取組としましては、市民の誰もが生涯にわたりスポーツをする・見る・支えるといったところの視点から、スポーツへの参画を通じて、健康増進や地域活性化に繋げることができるような、環境整備や機会の充実を図っていきたいと考えております。課題解決のための具体的な内容については資料をご参照ください。

スポーツ青少年課からは以上です。

【守本市長】 事務局の説明が終わりました。

時間も迫っておりますが、ただいまの説明を踏まえまして各委員からご意見等をおうかがいたします。

【清水委員】 スポーツ施設の課題として、老朽化による施設の整備や維持管理ということで、スポットクーラーなどを、冷暖房のない施設に入れていただけるということですが、6月から10月ぐらいまでは熱中症の危険性が高すぎて、大勢が集まって何か活動することが難しくなっていると感じています。今後は対策に係る予算取りを早急にしていかなければならないのではないかと考えています。

例を言いますと、9月にこども会の卓球バレー大会を予定しているのですが、昨年、三原健康広場の2階の冷房設備がある場所で開催したときに、人の密度が濃すぎて、冷房がほとんど効かずみんな熱中症になってしまうのではないかと心配する状態でした。冷房がある施設も限られており、他のイベントと重なってしまうと、せっかく市民が色々やろうとしても場所がないという状態になってしまいます。仕方なく縮小するのも悲しいことですし、大変だとは思っていますが、予算を取って空調設備を整備する方向で考えていただければと思っております。

【近藤委員】 先ほど、アフタースクール事業の資料の子どもの感想の中にダンスが大好きという話がありましたが、我が家の孫も、県外でチアダンス、チアリーディングに参加しています。そこでは3歳から社会人までの幅広い年齢層で活動しているようです。6月に入って大会があるらしいのですが、遠方なので私は一度も見に行ったこ

とがありません。それでも色々詳しく知っているのは、SNSでほぼ毎日といっているくらい画像やイベントや練習の情報がどんどん発信されているからです。

資料の中では、施設や取組を知ってもらうための周知方法として、ターゲットを絞ってSNS発信する、高齢者世代には口コミ・チラシ・新聞で、といったことも書かれていましたが、高齢の人も、孫の話になると結構SNSを活用していますよということを参考までお伝えさせていただきます。

【青木委員】 SNSの作成をスタッフだけでなく、小中高校生と一緒にやると思います。生徒自身の言葉、もしくは保護者の言葉は届きやすかったり、見る気になったりしますので、何もトライやる・ウィークだけが経験の場じゃないと思うので、もう少し範囲を広げて、広報に参加してもらえよう全体に募ってしまうのもいいのではないかと思います。

あと、公民館や図書館、それからスポーツ施設、全てそうだと思うんですけど、部活動の地域移行が進んでいった時に、それぞれが必要になる施設だと思います。今、あまり利用がなくても、徐々に利用率は上がってくるはずなので、それを見越して運営していくといいのかなと思います。空調設備、階段、エレベーターも忘れてはいけないと思います。

図書館も公民館もスポーツ施設も、結局人だと思います。そこにいる人がただなんとなくやっていると、行きたいという気持ちが生まれにくいかなと。そこにいる人が楽しくてくれる、もしくは情報発信してくれる。こんな本借りてみたいだから、次これどうですかなんて言ってくれるみたいなことが起きると、また行きたくなります。市立図書館もものすごい頑張ってるなと感じていますし、図書館司書さんも、利用者のニーズを把握して本を勧めてくれたりします。こういうことって、働く側もやりがいがあるし、こちらも行かせていただいて楽しいので、人としてその心の楽しさみたいなものが増えてくるといいなと思ったりしております。

【狩野委員】 先日、テレビで金沢の図書館の紹介がありました。そこは地元の人だけでなく観光客もたくさん集まって来られるそうです。斬新なデザインというところもあるのですが、おしゃべりしても良いコーナー、寝そべって読んでも良いコーナー、障害のある人も使える施設、そういう工夫がすごくされており、魅力ある図書館づくりをしているからだと思います。

それから、さきほどの近藤委員のお話と同様で、私も県外に孫がいて、民間のアフタースクールに通っています。月に4、5万円の利用料がかかるということでした。その上、そろばんや英語を教えてもらう場合は、追加の料金が必要だそうです。南あわじ市と違って、都会だったり、場所によっては、そういう形もありますのでご紹介しておきます。

【橋本委員】 洲本市の状況もだいたい同じような感じです。特に施設の老朽化対策は、順番にどんどんできていけばいいのですが、緊急性の高いものが優先されてどうしても後回しになっています。利用者は絶えずいらっしゃいますし、その方々の思いもあったりして、簡単に廃止にできるようなものでもなく、非常に苦しい状況であります。おそらく他の自治体も同様の状況なんだろうと思っています。

公民館につきましても、講座を見ますととても楽しそうで参加してみたいなという気持ち起きるのですが、実際にはその地域の一定の方が参加されているような講座だったりします。そういう講座も大事にして、簡単にそれを変えるのも良くないだろうということも想像できます。しかし、そういう講座とは少し違う講座、若者向けをイメージした講座などが、洲本市でも開設されたりしています。例えば、魚料理のさばき方とか、今更誰にも聞けないなみたいな、そういう講座には割と人が集まったりしていると思います。また、スマホの操作方法の講座はお年寄りの方も含めて結構人が集まっているということも聞いております。民業圧迫にならないような配慮は必要かと思いますが、スマホの操作については困っている方も結構いらっしゃるのかなと。もしかしたら講座というよりも、スマホの操作相談窓口みたいなものを作ればたくさんの方が来られるのではないかと考えたりします。ただ、民業を圧迫することになってはいけないとは思いますが、そんな状況でございます。

【山本委員】 私は施設の老朽化が気になっております。これまでも順番に市内の図書館や公民館の改修工事はされてきたかと思いますが、年数とともに建物も傷んできますし、比較的新しい施設でも雨漏りしているということも実際に見て来ました。プールで屋根が落ちたという話も過去に聞いたことがあります。施設の点検も順番にきっちり行うことが大切だと思います。施設のメンテナンスに力を入れていただいた上で、空調設備等の整備をお願いしたいと思います。

安全できれいな施設で、皆さんが安心して楽しめる場所をめざしていただきたいと思います。

【新宅教育長】 「学ぶ楽しさ日本一」のサブテーマ「生涯を通じて、学びのいぶきがみなぎるまちづくり」は、子どもから大人まで集まって活動ができる、そういう場所があるということが大事なことだと思っています。今回の部活動の地域展開についても、中学生だけが地域に移って終わりではなく、子どもから大人まで一緒に活動できるような場を作っていくということです。おそらく、これまでの枠組みから、活動する時間帯や活動する人も変わってくると思われます。現在、部活動の各種目で検討が始まっていますが、やはり屋外スポーツについては、中学校の部活動であれば放課後の明るい時間帯に活動できていましたが、おそらく時間が後ろへずれてくるだろ

うと思われます。暗い時間帯に活動するとなると、照明設備がある施設でないといけない、じゃあどこで活動するのかというような課題も出てきております。やはり新しい形を作っていく時に、施設をどういうふうに再編して取り組んでいくのかということも、今後のひとつの課題だろうと思っております。

【守本市長】 施設に関しましては、公民館の改修は徐々に実施してきておりますが、老朽化が著しいのはスポーツ施設です。他自治体で、冷房化を進めていってるところはあるのですが、本市では、今年度きちんと検討しようということにしています。というのは、元々体育館という施設は、いかに通気性をよくするかという観点から設計されております。ですから、足元の方に窓を作っており、風を通す工夫がされています。そういう施設に冷房設備を入れると、膨大な電気の無駄遣いになる可能性が極めて高いということになります。おそらく、これからそういう施設に対する効果的な技術が出てくるだろうと思われますので、現時点で早急に進めるのは控えた方がいいかなと考えております。それから、私の個人的意見としては、進める場合は、中学校からになるのかなという感じがしています。そして、中学校だけで利用するのではなく、小学校とシェアしていくというような形でまずは進めていければと思っております。

また、部活動を地域展開した時、南あわじ市では、非常に熱心な人が多いので、おそらく様々な形での活動ができていくだろうと思います。その時の、最大の課題が移動手段になってくると思いますので、したがって各種目についての拠点施設を決めつつ、そこに対してどういう移動手段を提供していくのかという複雑なパズルを解いていくといったような話になってくるのではと思っております。まだ、現時点ではその姿がほぼ見えていない感じですので、施設の整備についても、今あるものをただ今ある形で更新することより、どんな活動をするのかというところを、ある程度見据えた上で更新をしないと、財政面も厳しいですし、使い勝手が悪いものになっては困ります。外から見ていると、あまり動きがなくて大丈夫かなというふうに見えるかもしれませんが、今申し上げた理由もあって、慎重に進めていきたいと思っております。

図書館や玉青館に関しては、現在、各施設でこんなことをやりたいと意欲を持った職員を配属しておりますので、モチベーション高くやっていると思っております。また色々なアイデアを提供いただけたら、どんどん取り組んでいける状態ですので、ぜひよろしくお願いします。

【守本市長】 議題については、これですべて協議いただきましたが、他に何かございましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。

5 閉 会

【守本市長】 本日は、盛りだくさんのご意見をいただきありがとうございました。ぜひとも皆様のご意見を反映できるように努めてまいりたいと思いますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

これをもちまして、令和7年度第1回総合教育会議を閉会いたします。

午前11時59分